

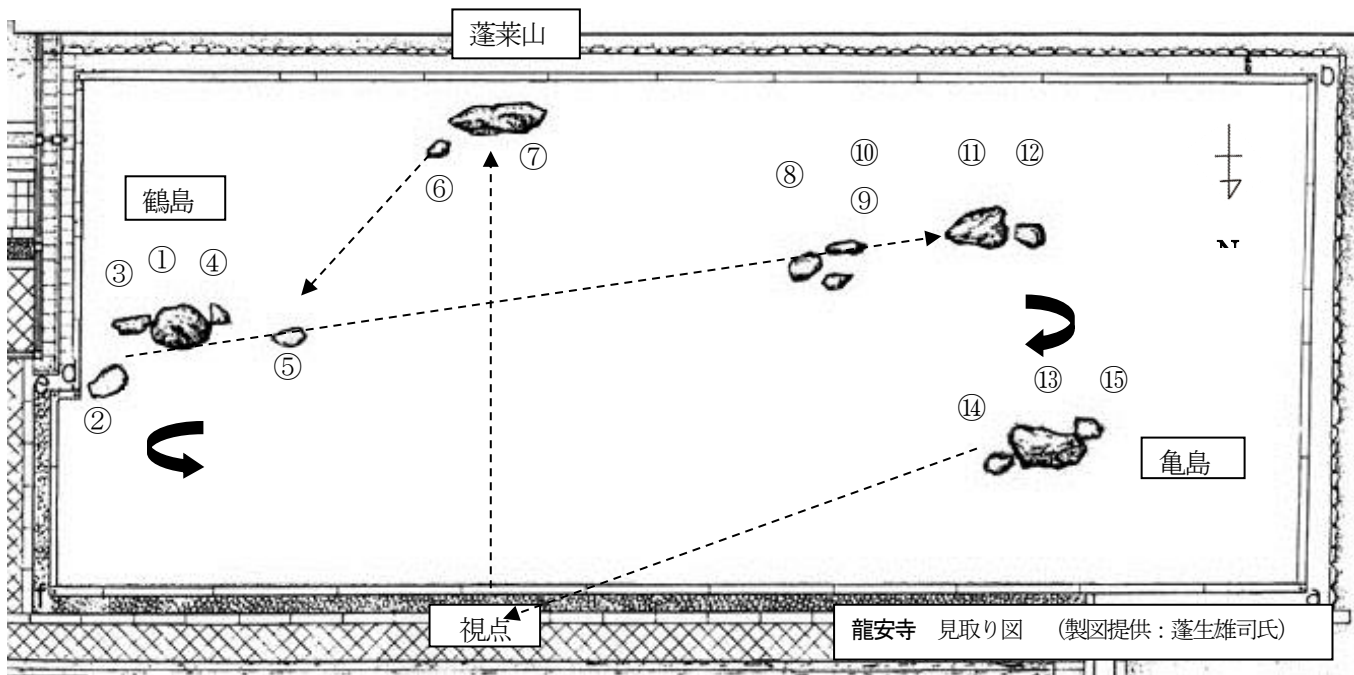
当庭に解釈は多数あるが、明確にその根拠を述べた本は少ない。ここに現代枯山水の祖重森の説と借景があつてこそ抽象庭園が成立するとの大山説を紹介する。



中央の小石による奥の石組への誘導を賞賛

重森の龍安寺解釈

重森は龍安寺を最も抽象化された鶴亀蓬萊の庭と解釈し、石組を関連させる小石の配石手法に驚嘆した。また、龍安寺のように三方を壁に囲まれた白砂の平庭は、重森が最も好む抽象的な庭園を演出することができる。古典庭園には抽象性の高い庭は非常に少ない。その理由は作庭が難しく、また世の中から受け入れられにくいからである。しかし、重森はこの龍安寺の庭を目標に終生挑戦し、抽象度の高い庭を残した。



大山平四郎氏の説 (大山平四郎著『龍安寺石庭 七つの謎を解く』淡交社より)

- ①彼は龍安寺の南土壁や東西の土壁越しに京都の市街地が見えたと解釈し、東山や西山も見える雄大な自然の景色と好対照の白砂と15石のみの単純な造形が、より際立つとの解釈である。
- ②壁際の石を臥せ石にして、手前の石を豎石にし、かつ西側の土塀の高さは方丈側にくらべ南壁側は低くなっている(約70cm)ことからして、明確に遠近法を理解した配石である。
- ③方丈が焼失後大きな方丈が移設されたため、方丈の縁側が石庭の北側に1.5m迫り出した。玄関は方丈と共に移設されたため約5mも方丈側に入り込んだため、玄関南側に壁が作られ東側の見通しが悪くなり、さらに石庭の東側は最大1m狭くなった。つまり、石庭はより横長のいびつな形になり、さらに、東側に壁が出来たことで、左手前にある主石群が土塀に近くなり、より窮屈な配石となってしまった。また、石庭東側にある東庭が新たに作られた玄関の壁により、見えにくくなってしまい、石庭はより狭隘感が否めない庭となってしまった。

大山説の結論

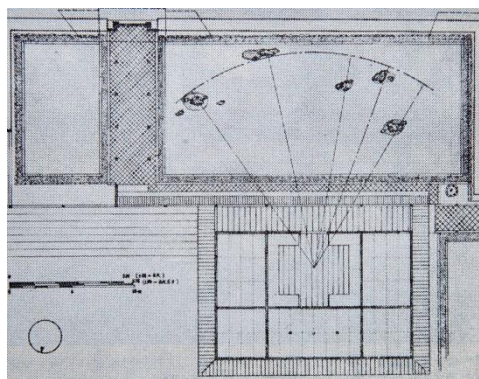
雄大な自然を背景とする借景があつてこそ、人工造形の抽象庭園が成立する。(大徳寺本坊、圓通寺、酬恩庵などが枯山水庭園であることは不思議ではなく、逆に借景が有つてこそ抽象枯山水が生まれるのである)

龍安寺の地割

左図のように扇状の布石は龍源院や雑華院にもある。奥行のない場所で全ての石を見渡せる、黄金の地割とも云える。

参照庭園の頁

平庭式枯山水庭園で庭園背後に借景の山が見え、長方形に囲まれ白砂の敷かれた類似の庭は円通寺 130P、雑華院 131P、興禅寺 146P がある。



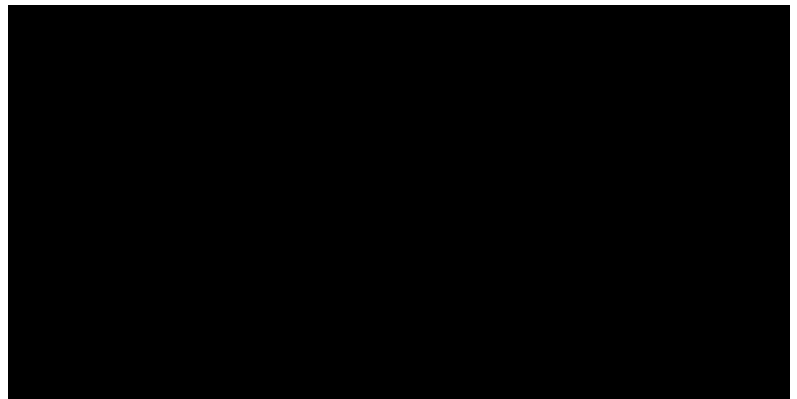
龍安寺の現状



龍安寺全景：現在では土塀の背後に見えていた京都市街地が全く見えなくなってしまった



移築された玄関と新たに作られた土塀

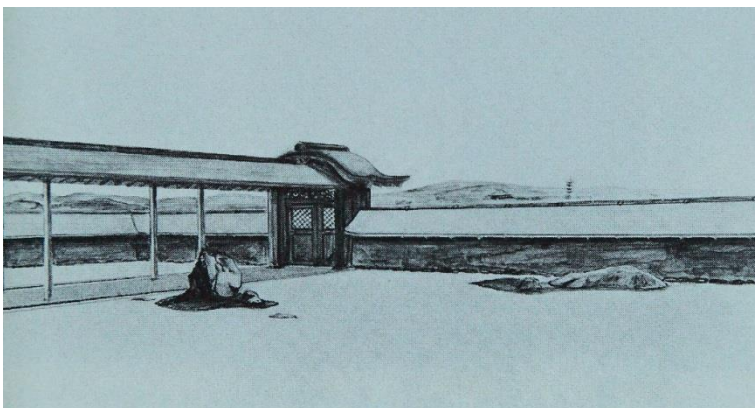


移築された玄関は土塀より約5m中に入っている

文献資料について

寛政11年(1799)に刊行された秋里籬島の『都林泉名所図会』118頁には細川勝元が書院から毎朝男山八幡宮を遥拝するために、庭に木を植えなかったことが伝承されていたことが解る。ところが、石庭が作られてから約250年経過した寛政11年頃には「古松高く老いて昔の風景(そ)となる」と書かれている。つまり昔の風景はまばらにしか見えなくなった、と書かれているのである。

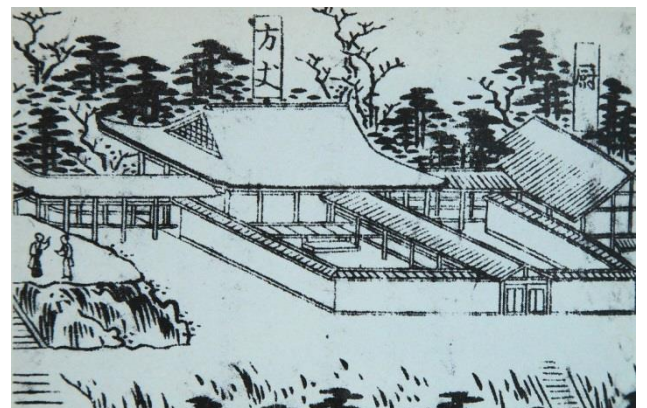
また、126頁には「当山に八景あり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。(東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雲山虬松、隣院紅葉)」とあり、方丈から八景が見えたことが具体的な景色で書かれている。



方丈から見た石庭の東側風景の仮想復元スケッチ

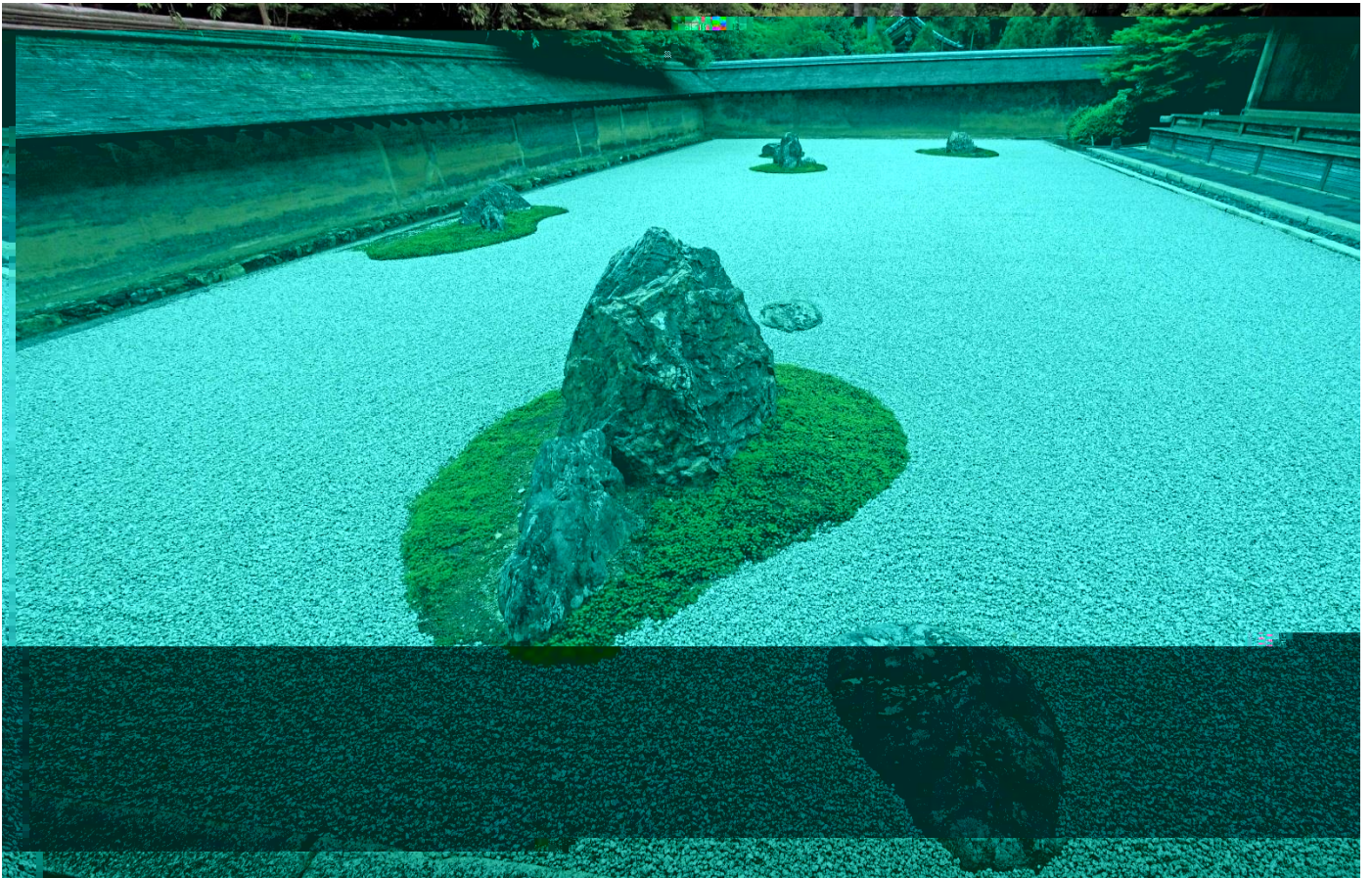
歩廊には壁が無く東庭と土塀越しに東山連峰が見えた。石庭の左にある石組群は、丸みのある東山とは対照的に、厳格な造形にした。

出典：大山平四郎著『龍安寺石庭 七つの謎を解く』淡交社(そのイメージが具体的に45頁に上記のようなスケッチが記載されている)

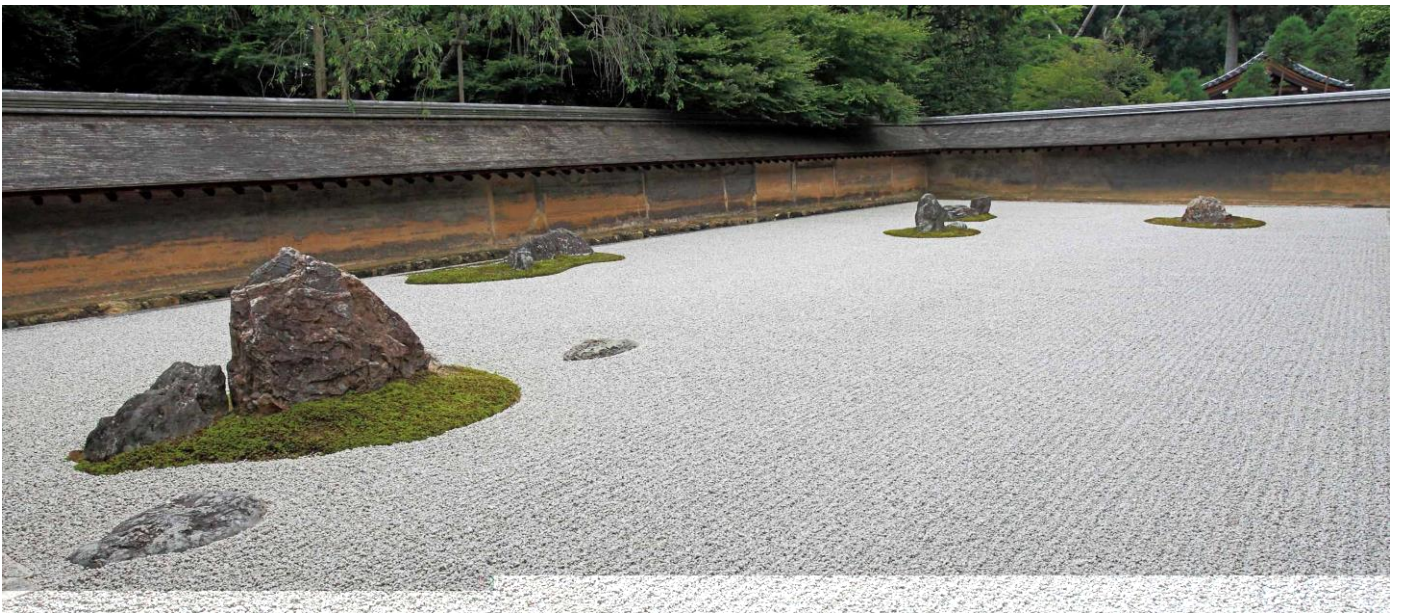


消失前の玄関の位置は土塀の位置にあった証拠

出典：『都名所図会』の図は消失の19年前の1780年に刊行)。この図の玄関の位置は左に寄りすぎているが、歩廊に壁が無いため、東山などが遠望されたと思われる。**備考** この図には石庭が描かれていないため、「石庭は火災の後に作られた」との説の根拠でもある。



東側から見た石庭。奥にある西側土塀は水平であるが、屋根は左側が低くなっているのは、遠近法効果のため。



廊下から見た石庭。主石を支える形の石が主石に接していないことに注目。



西側からの景。東から西側にかけて石組みが直線状



南側土塀よりの石の裏側には氏名が刻まれている。